



故 松本 慶蔵 先生

公益社団法人日本化学療法学会名誉会員

1929年 1月15日 生

2023年 10月 2日 逝

故 松本 慶蔵 先生 (2023 年 10 月 2 日)

略歴

【学歴・職歴】

- 1955 年 3 月 東北大学医学部卒業
1960 年 3 月 東北大学医学部大学院内科系終了
1961 年 2 月 東北大学医学部附属病院第 1 内科助手
1972 年 10 月 東北大学医学部附属病院第 1 内科講師
1974 年 10 月 長崎大学熱帯医学研究所臨床部門教授
1981 年 4 月～1991 年 3 月 長崎大学熱帯医学研究所所長併任
1994 年 3 月 長崎大学熱帯医学研究所臨床部門教授定年退官
1994 年 4 月 伴帥会愛野記念病院名誉院長
1994 年 5 月 長崎大学名誉教授

【学会・社会活動歴】

- ・日本熱帯医学会 (理事)
第 34 回日本熱帯医学会大会会長 (1992 年 11 月 25～26 日)
第 14 回国際熱帯医学・マラリア学会 (International Congress of Tropical Medicine and Malaria : ICTM) 会長 (1996 年 11 月 17～22 日)
- ・日本感染症学会 (理事)
第 63 回日本感染症学会西日本地方会総会・学術集会会長 (1993 年 11 月 25～26 日)
- ・日本化学療法学会 (理事)
第 28 回日本化学療法学会西日本支部総会会長 (1980 年 12 月 4～5 日)
第 38 回日本化学療法学会総会会長 (1990 年 5 月 17～19 日)
- ・日本炎症・再生医学会 (理事)
第 7 回日本炎症・再生医学会学術総会会長 (1986 年 7 月 25～26 日)

【受賞歴】

- 1972 年 3 月 1971 年度 ACCP (アメリカ胸部医学会) 日本支部賞
1974 年 1 月 1973 年度東北大学医学部奨学賞金賞
1975 年 3 月 第 20 回日本感染症学会二木賞
「インフルエンザ菌慢性呼吸器感染症の基礎的臨床的研究」
感染症学雑誌 第 48 巻第 4 号 117-125.
1991 年 4 月 紫綬褒章
2000 年 11 月 勲三等旭日中綬章
2005 年 2 月 第 1 回ヘルシー・ソサエティ賞
2023 年 11 月 叙位・叙勲 従四位

【主な著書】

- ・ Clinical Microbiology of Respiratory Infections
Keizo Matsumoto, Tsuyoshi Nagatake March 31, 1994 (Publisher : Department of Internal Medicine, Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University, Showado Printing Co, Ltd, Isahaya, Japan, 1st edition March 31, 1994)

- ・病原菌の今日的意味
松本慶蔵編 医薬ジャーナル社 2011年11月 改訂4版(1987年8月初版発行)
- ・細菌感染症の変貌と化学療法
医薬ジャーナル社 1993年10月
- ・セフェム系抗生物質
医薬ジャーナル社 1991年1月
- ・感染症の化学療法：抗生物質の選び方と使い方
松本慶蔵, 鈴木寛編著 新興医学出版社 1985年10月
- ・細菌感染症の動向：起炎菌の正しい決定と感染症の変貌
松本慶蔵編 医薬の門社 1982年12月

松本慶蔵先生を偲んで

松本慶蔵名誉教授が2023年10月2日に享年94歳でご逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。先生は1929年1月、宮城県志田郡松山町にて誕生、早くにお父様を亡くされお母様の薫陶により成長されました。松山町出身者では初めての海軍兵学校に入学、しばらく佐世保の針生島におられたとのこと。終戦直後、旧制の二高に進み、本当は文科系志望で一橋大学に進学したかったが、結局お母様の意見もあり東北大学医学部に進学したとよく伺いました。

1955年、東北大学医学部第一内科学教室に進まれ、ご親族に結核で倒れた方が何人もおられる中、結核菌を扱うことへの不安を抱えながら、やがて同内科細菌学室長として活躍を開始。呼吸器感染症の診断・治療に邁進され、その業績に対し日本感染症学会二木賞をはじめ ACCP（アメリカ胸部医学会）日本支部賞、東北大学医学部奨学賞金賞を受賞され、その後松本感染症学を展開されました。1974年10月長崎大学熱帯医学研究所の臨床部門初代教授として就任されたのですが、初代教授としてのご苦労は医局員、機材、病棟・外来などなど枚挙にいとまなしですが、持ち前のバイタリティと根気そして人柄により克服されました。そのときの逸話は数知れずありますが、誌面の制限があり割愛します。また1981年からの10年間、熱帯医学研究所所長として同研究所の発展にも貢献、1989年には全国共同利用研究所へ改組され全国的にも存在意義を高められたのです。これら東北大学時代からの一連の業績に対して1991年紫綬褒章が授与されました。学会・研究活動は国内にとどまらず、1985年には文部省と共催で「国際シンポジウムカポジ肉腫・AIDS」を長崎で開催、また日本化学療法学会、日本熱帯医学会、日本炎症・再生医学会のみならず、1996年には国際熱帯医学・マラリア学会の会長を務められ、幅広い視野にたった研究はこの後熱帯医学研究所の更なる世界への飛躍の礎ともなりました。また熱帯医学研究所臨床部門（熱研内科）としてはタイ国チェンマイ大学医学部との学部間学術協定、ウガンダマケレレ大学医学部との共同研究やバングラデシュ・ダッカ小児病院との共同研究などを通じた国際的な感染症克服へ向けた活動にも精力的に取り組まれました。退官後に医師として社会に貢献した人に贈られるヘルシー・ソサエティ賞の第一回受賞者となられたことから先生の生き方が見えてきます。

松本先生との出会いは、私が長崎大学医学部学生時代の50年以上前のことで、医学部の学生実習でお会いした先生は、activeで厳しい中にも人懐っこい感じがして、陽気な方でした。長崎大学熱帯医学研究所臨床部門の初代教授として赴任されたばかりの頃で、何かとご苦労の多い時期だったと思いますが温かいお人柄に惹かれて人が集まっており、私もその一人でした。1979年に入局、病棟は重症の呼吸器感染症患者が多かったが、当時は抗菌薬の発展がめざましく、数々の新しい抗菌薬が日本発で開発され、その研究と臨床応用に取り組み、先生は喀痰のグラム染色とみずから考案された喀痰定量培養を使って呼吸器感染症の診断と治療に一時代を築かれました。私も在局中に覚えた喀痰のグラム染色を今でもコツコツと日々の臨床の中で実践しており、若いときにやったことは体が忘れません。教授赴任後のお忙しい中で先生ご夫妻は各医局員の家庭に子供が生まれると、わざわざお祝いに訪問されたりして、恐縮の至りでした。教室員が増えてからはそれもままならぬこととなりましたが、その温かいお気持ちは、仕事のうえでの厳しさを超えて私や教室員の心の中に浸み込んでいたのではないかと思います。初代教授として在任された約20年間に総数69名の医局員が診療、研究、教育に携わりました。

先生は金銭に関しては潔癖な方で長崎大学熱帯医学研究所所長時代に大きな海外プロジェクトでも関連業者と私的に会うことを好まれず「李下の冠、瓜田の履」という教えはその後の私の規範になりました。医師はどうあるべきか、「患者さんが良くなったときには手を取ってともに喜び、辛いことや悲しい重荷は軽くして」という医師の基本姿勢は松本先生から教えていただきました。残念なことに先生の様には実践できない不肖の弟子ですが。

熱帯医学研究所臨床部門（熱研内科）教授を退かれてからは息子さんや娘さんに近い東京に住まわれることとなり、私も時々お邪魔して雑談で長崎の話をしたりしました。先生と奥様の人生の中で長崎で過ごした期間



1994年3月 松本慶蔵教授退官記念（長崎市）

が一番長いそうで、ことのほか長崎のことを話すのがお好きで、私が来ると長崎の香りがするといって喜んでいただいたことを思い出します。仕事の厳しさが取れた先生は好々爺となられ、一緒に話すひときは私にとっても愉快で楽しい時間でした。

ただ最近はお口数も少なく座ったままで動かれず、じっと奥様と私の会話を聞いておられることが多くなり、昨年夏に訪問したときには、帰り際に「またな…」と仰ってドアのところまで見送っていただいたのが最後に見た姿でした。

「こんなに長生きするとは思わなかった」と言っておられ、病状が悪化されたときも入院治療による延命より、現在のお住いで奥様のもと静かな最後を望まれたように私には感じられました。享年94歳の大往生でした。心からご冥福をお祈りいたします。松本先生長いことありがとうございました。

2024年1月

力富直人 記
（長崎呼吸器リハビリクリニック）